

# 「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」における調査方法の変化

荻原 祐二 (東京理科大学 教養教育研究院, yogihara@rs.tus.ac.jp)

## The changes in the survey methods of the “Tamahiyo Rankings of Baby Names”

Yuji Ogihara (Institute of Arts and Sciences, Tokyo University of Science, Japan)

### 要約

名前・名づけについての実証研究を進めるためには、直観や印象ではなく、エビデンスに基づいた分析・考察を行う必要があり、そのためには信頼できる名前データが不可欠となる。日本では、2005年から2021年まで継続して大規模な調査を行っている「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」が重要な役割を占めている。しかし、2019年から調査の方法が変更されており、サイト上では明記されていない点に注意する必要がある。特に、経時的な変化を分析する際には、対象そのものの本質的な変化なのか、調査方法の変化によるものなのか判別し、対象の本質的な変化を的確に捉えるためにも、調査方法の変化は正確に理解しておくべきである。そこで本論文では、「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」における調査方法の変化について説明した。2005年から2018年までの調査と比べて、2019年から2021年の調査では、調査対象が質的に広がっており、それに伴ってサンプルサイズが大幅に増加していた。また、調査結果の公開範囲が2019年以降は限定的になっていたと同時に、得られたデータとは独立した論拠から、名前の紹介や考察が行われるようになっており、それまで可能であった定量的な分析が困難となっていた。これらの情報は、「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」を用いて分析・考察を行う際に有用となる。

### Abstract

To conduct empirical research on names and naming, it is necessary to do analyses and have discussions based on evidence, not intuition and impression, which requires reliable data on names. In Japan, the “Tamahiyo Rankings of Baby Names,” which has continuously conducted large-scale yearly surveys between 2005 and 2021, plays a crucial role. However, the surveys changed its methods in 2019 and those changes have not been mentioned on its website. Changes in the survey methods should be precisely understood particularly when analyzing temporal changes in names and naming to distinguish essential changes from by-products of methodological changes. Therefore, this article explains the changes in the survey methods of the “Tamahiyo Rankings of Baby Names”. The surveys between 2019 and 2021 collected data from a broader layer of participants than those between 2005 and 2018, which remarkably increased the sample sizes of the surveys between 2019 and 2021. Moreover, the surveys between 2019 and 2021 displayed a narrower range of results and discussed names based on rationales independent of survey data, making it difficult to conduct quantitative analyses for this period. This information will be helpful when analyzing the “Tamahiyo Rankings of Baby Names” and discussing names and naming.

### キーワード

名前, 名づけ, 新生児, 赤ちゃん, 調査

#### 1. 日本の名前研究に用いられるデータ

名前の特徴や名づけの変化など、名前・名づけについての実証研究を進めるためには、直観や印象ではなく、エビデンスに基づいた分析・考察を行う必要がある。その際に不可欠となるのが、信頼できる名前データである。

アメリカ (e.g., Ogihara, 2021c; Twenge et al., 2010; 2016) や中国 (e.g., Bao et al., 2021; Ogihara, 2020b; Stojcic et al., 2020) では、公的機関が名前のデータを収集し集約管理して、公開している。しかし、日本では名前に関する大規模なデータが国の公的機関によって公開されていない (Ogihara, 2020a, 2022b)。そのため日本では、国の公的機関ではなく、企業が収集・公開している名前に関するデータが重視されている。

##### 1.1 「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」

その中でも、ベネッセコーポレーション (以下ベネッセと

表記する) が毎年公開している、「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」のデータは重要な役割を占めている。ベネッセは、2005年から2021年まで継続して「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」調査を大規模に実施し、その結果の一部を、特集サイトを毎年作成して公開している。

この貴重な調査結果は、実証的な研究に実際に用いられている。例えば、Ogihara et al. (2015) では、明治安田生命保険相互会社の調査結果と共に、2005年から2013年の調査結果を用いて分析を行い、人気のある名前を新生児に与える傾向が低下していることが示されている (個性的な名前の増加については、Ogihara, 2021a; 2022a)。さらに、個性的な名前の類型や特徴について説明する際にも、実例の一部として用いられている (荻原, 2015; Ogihara, 2021b)。

##### 1.2 調査方法の変更

本調査の長所のひとつは、2005年から2021年まで17年にも渡って継続して大規模な調査を行い、その結果の一部を公表し続けている点にある。2000年代から現在まで継続して大

規模な調査を行い、重要な情報を世間に公開し続けている企業は限られている。

しかし、2019年から調査の方法が変更されており、その点がサイト上では明記されていないことに注意する必要がある。そのため、この調査を用いて分析・考察を行う際には、この変更を考慮する必要がある。特に、経時的な変化を分析する際には、データの収集方法が変更された場合、たとえ分析の結果に大きな変化が見られても、それが対象そのものの本質的な変化なのか、調査方法の変化によるものなのか判別することが難しい。対象の本質的な変化を的確に捉えるためにも、調査方法の変化は正確に理解しておくべきである。

### 1.3 本論文

そこで本論文では、「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」における調査方法の変化について説明する。<sup>(1)</sup> この情報は、「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」調査を用いて分析・考察を行う際に有用となる。

さらに、「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」は、ウェブ上の特集サイトに情報がまとめられているが、特集サイトに明記されていない、著者が個別に問い合わせを行った際に得られた情報についても本論文に含めた。<sup>(2)</sup>

## 2. 調査方法の変化

### 2.1 調査対象の変化

2005年から2018年までの調査では、「たまひよの直販商品をご利用のお客さまからお寄せいただいたお子さまのお名前を集計」していた(ベネッセ, 2021)。

一方で、2019年から2021年までの調査では、「たまひよの商品やサービスをご利用のお客さまからお寄せいただいたお子さまのお名前を集計」していた。違いは「たまひよの直販商品」が2019年以降は「たまひよの商品やサービス」に変更されている点である。「商品やサービス」の方が、「直販商品」よりも対象が大きく、「直販商品」は「商品やサービス」に包含されるため、調査対象がより広範になっていると言える。

また、2018年までの調査と2019年以降の調査において調査対象の変更以外に変更した点があるかベネッセに問い合わせたところ、他に変更点はないとの回答が得られた。

### 2.2 サンプルサイズの変化

#### 2.2.1 絶対数の変化

2.1で述べた調査対象の変化に伴い、調査のサンプルサイズも大きく変化していた。各年の調査における男女別サンプルサイズ(絶対数)を図1に示した。

2005年から2018年までの調査では、サンプルサイズは年を経るごとに小さく減少していた。具体的には、2006年に最大値49,124人(男児：24,998人、女児：24,126人)となり、その後は年を経るごとに低下し、2018年に最小値9,459人(男児：4,929人、女児：4,530人)となっていた。この期間の平均サンプルサイズは、30,017人(男児：15,442人、女児：14,575人)であった。

一方で、2019年から2021年までの調査では、サンプルサイズは年を経るごとに増加していた。具体的には、2018年に

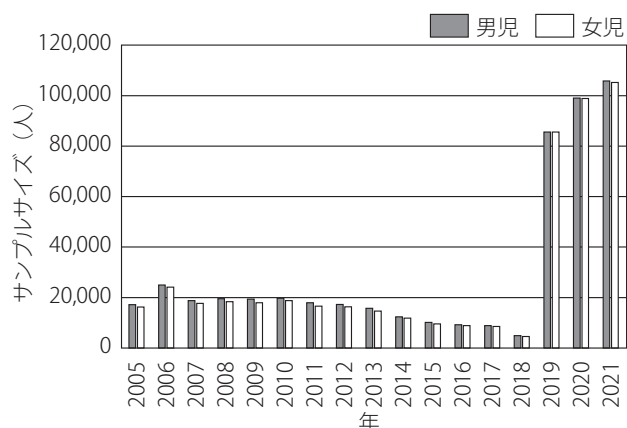


図1：各年の調査における男女別サンプルサイズ(絶対数；2005～2021)

最小値171,111人(男児：85,545人、女児：85,566人)となり、その後は年を経るごとに増加し、2021年に最大値211,039人(男児：105,784人、女児：105,255人)となっていた。この期間の平均サンプルサイズは、193,363人(男児：96,801人、女児：96,563人)であった。

2005年から2018年までのサンプルサイズと、2019年から2021年までのサンプルサイズの違いは、年ごとの偶然によるばらつきといった変化ではなく、両期間の平均サンプルサイズで比較して6.44倍増加しており、大幅な変化と言える。

#### 2.2.2 相対数の変化

サンプルサイズは、母集団のサイズにも依存する。ここでの母集団である、当該年に生まれた新生児の数(出生数)は、2005年から2021年まで、男女を問わず年々減少していた(図2；データは厚生労働省(2021)による人口動態調査の値を用いた<sup>(3)</sup>)。そのため、既に述べた通り、サンプルの絶対的なサイズは変化しているが、その相対的なサイズは変化していないかもしれない。そこで、出生数に占めるサンプルサイズの絶対数の割合(%)を計算し、サンプルサイズの相対数を算出した(図3)。

その結果、相対的なサンプルサイズの変化は、絶対的なサ

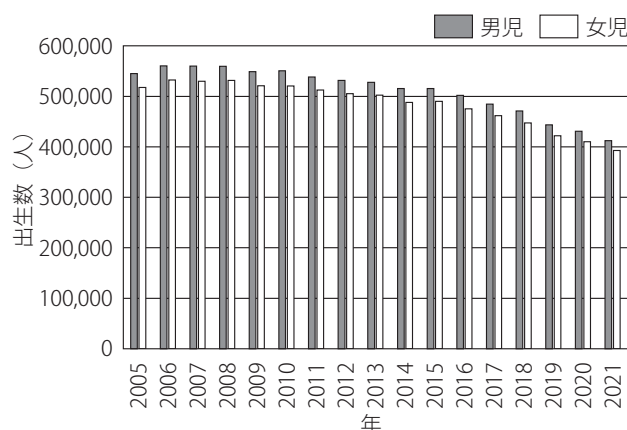


図2：男女別出生数(2005～2021)

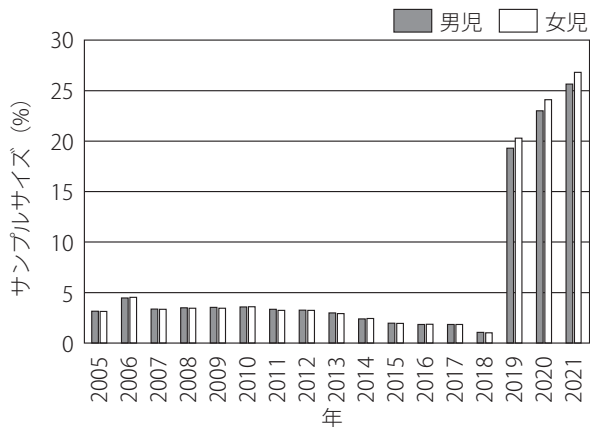


図3：各年の調査における男女別サンプルサイズ（相対数；2005～2021）

サンプルサイズの変化と一致していた（図3）。2005年から2018年までの調査では、サンプルサイズは年を経るごとにおおよそ減少していた。具体的には、2006年に最大値4.50%（男児：4.46%、女児：4.53%）となり、その後は年を経るごとに低下し、2018年に最小値1.03%（男児：1.05%、女児：1.01%）となっていた。この期間の平均サンプルサイズは、2.87%（男児：2.87%、女児：2.86%）であった。

一方で、2019年から2021年までの調査では、サンプルサイズは年を経るごとに増加していた。具体的には、2018年に最小値19.78%（男児：19.29%、女児：20.29%）となり、その後は年を経るごとに増加し、2021年に最大値26.22%（男児：25.66%、女児：26.81%）となっていた。この期間の平均サンプルサイズは、23.18%（男児：22.65%、女児：23.73%）であった。1年間に生まれた新生児の4人にひとり、もしくは5人にひとりからデータを得ることができていることとなり、非常に大きいサンプルサイズと言える。

2005年から2018年までの相対的なサンプルサイズと、2019年から2021年までの相対的なサンプルサイズの違いは、年ごとの偶然によるばらつきといった変化ではなく、両期間の平均サンプルサイズで比較して8.09倍増加しており、大幅な変化と言える。

### 2.2.3 重複の可能性について

2019年以降のサンプルサイズが非常に大きかったため、確認のために、収集されたデータ内において、同一人物の名前を重複して集計している可能性についてベネッセに問い合わせを行った。顧客が、たまひよの商品やサービスを複数利用し、調査に回答している可能性は十分に考えられる。同一人物の名前が別人として集計されてしまうと、名前ランキングの結果は現実を反映していないこととなり、妥当な信頼できる結果ではなくなってしまう。そのため、同一人物の名前が重複して集計されている場合には、分析前にそれらを取り除く必要がある。

その結果、2005年から2021年の調査すべてにおいて、同一人物の重複している名前は除去して集計しているとの回答を得た。その際の判別の具体的な手続きについても問い合わせ

を行ったが、個人情報等に問題のない抽象的な説明の範囲でも、回答はできないとのことであった。

## 2.3 関連する変化

調査方法そのものの変化ではないが、調査に関連する重要な変化について説明する。この変化も、調査に対する考え方や姿勢の変化を反映している可能性があるため、把握しておくべき重要な点である。

### 2.3.1 結果の公開範囲の変化

「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」では、調査結果の一部を特集サイトで公開しているが、その調査結果の公開範囲も変化していた。

2005年から2018年までの調査では、ランキングに含まれる具体的な名前の要素（表記・漢字・読み）と前年度の順位だけでなく、その要素を持つ新生児の数とサンプルに占める割合が公開されていた。

一方で、2019年から2021年までの調査では、ランキングに含まれる具体的な名前の要素と前年度の順位のみが公開されており、その要素を持つ新生児の数とサンプルに占める割合は公開されなくなった。

新生児の名前に対する実証的な研究を行うためにはこれらの具体的な数値が必須であるため、それらの数値を問い合わせによって教えてもらうことが可能か確認した所、不可能とのことであった。よって、2019年以降の調査は、ランキングに掲載されている名前の種類と前年度からの順位変化についての分析を行うことは可能だが、絶対数や相対数を用いた定量的な分析を行うことは不可能となっていた。そのため、2018年までは可能であった新生児の名前の定量的な分析は、2019年以降は難しくなっている。

### 2.3.2 結果の公開内容と提供する関連情報の変化

メインとなる結果（e.g., 人気のある表記・漢字・読みのランキング）とは別に、得られた結果の公開内容と、読者に提供する関連情報も変化している。

2005年から2018年までの調査では、得られたデータから、様々な追加の分析や考察が行われていた。例えば、地域別の結果や保護者の年代別の結果がデータと共に説明されていた。

一方で、2019年から2021年までの調査では、得られたデータとは独立した論拠を基に、名前の紹介・考察が行われていた。例えば、陰陽五行説や言霊（ことだま）、姓名判断についての考え方やこれらに基づいたお勧めの名前が紹介・説明されていた。それに伴い、名前の様々な要素（e.g., 音の響き、漢字の種類）の中でも、画数に対する配分が強くなっていた。2019年は特にこれらに関する詳細な説明が加えられていた。

## 3. まとめ

本論文では、日本における名前研究において重要な役割を占めている、「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」の調査方法の変化について説明した。2005年から2018年までの調査と比べて、2019年から2021年の調査では調査対象が質的に

広がっており、それに伴ってサンプルサイズが大幅に増加していた。また、調査結果の公開範囲が2019年以降は限定的になっていったと同時に、得られたデータとは独立した論拠 (e.g., 陰陽五行説、言霊) から、名前の紹介や考察が行われるようになっており、それまで可能であった定量的な分析が困難となっていた。

本調査を用いた分析結果を解釈するには、これらの調査方法の変化に注意する必要がある。特に、2005年から行われてきた調査の経時的な変化を検討するには、その変化が対象の本質的な変化の反映なのか、調査方法の変化によるものなのか切り分けて考察する必要がある。その際に本論文がまとめた情報が貢献すると考えられる。

#### 謝辞

「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」調査に関する貴重な情報を御提供頂きましたベネッセコーポレーションに感謝申し上げます。

#### 注

- (1) ウェブサイトにおける記述や公開されているデータの内容は本論文執筆時 (2021年11月) に保存したものに基いている。これらの内容は論文執筆時から変更されている可能性がある。
- (2) 著者の問い合わせによって得られた情報を公開することの許可は得られている。
- (3) 2021年の数値は、確定数ではなく、推計値を用いた。確定数は、調査年の翌年9月頃に公表される (厚生労働省, 2021) ため、本論文執筆時 (2021年12月) には公表されておらず、使用することができなかった。推計値は、厚生労働省が例年発表している速報値と概数を用いた計算式に準じて算出した (804,935人)。この数値は、日本総合研究所による妊娠届出数から算出した出生数推計値 (「81万人程度」; 日本総合研究所, 2021) と一致している。男女別の数値は、性別ごとの速報値が公開されていないため、前年確定数の男女割合 (男児 : 女児 = 1.050 : 1.000) を用いて算出した (男児 : 412,324人、女児 : 392,612人)。この男女比は、近年安定しており、ほとんど変化していない (2017: 1.049、2018: 1.052、2019: 1.051)。

#### 引用文献

- Bao, H. W. S., Cai, H., Jing, Y., and Wang, J. (2021). Novel evidence for the increasing prevalence of unique names in China: A reply to Ogiwara. *Frontiers in Psychology*, Vol. 12, 731244. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.731244>.
- ベネッセコーポレーション (2021). 赤ちゃんの名前ランキング. <https://st.benesse.ne.jp/ninshin/name/>.
- 厚生労働省 (2021). 人口動態調査. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1.html>.
- 日本総合研究所 (2021). 2021年の出生数・死亡数の見通しリサーチ・フォーカス. No. 2021-028.
- 荻原祐二 (2015). 近年の日本における個性的な名前の特徴とその類型. *人間環境学研究*, Vol. 13, 177-183. <https://doi.org/10.4189/shes.13.177>.

- Ogiwara, Y. (2020a). Baby names in Japan, 2004-2018: Common writings and their readings. *BMC Research Notes*, Vol. 13, No. 553. <https://doi.org/10.1186/s13104-020-05409-3>.
- Ogiwara, Y. (2020b). Unique names in China: Insights from research in Japan—Commentary: Increasing need for uniqueness in contemporary China: Empirical evidence. *Frontiers in Psychology*, Vol. 11, 2136. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.02136>.
- Ogiwara, Y. (2021a). Direct evidence of the increase in unique names in Japan: The rise of individualism. *Current Research in Behavioral Sciences*, Vol. 2, 100056. <https://doi.org/10.1016/j.crbeha.2021.100056>.
- Ogiwara, Y. (2021b). How to read uncommon names in present-day Japan: A guide for non-native Japanese speakers. *Frontiers in Communication*, Vol. 6, 631907. <https://doi.org/10.3389/fcomm.2021.631907>.
- Ogiwara, Y. (2021c). Social security number holders in the United States, 1909-2019. *Frontiers in Big Data*, Vol. 4, 802256. <https://doi.org/10.3389/fdata.2021.802256>.
- Ogiwara, Y. (2022a). Common names decreased in Japan: Further evidence of an increase in individualism. *Experimental Results*, Vol. 3, No. e5, 1-11. <https://doi.org/10.1017/exp.2021.27>.
- Ogiwara, Y. (2022b). Common writings of baby names in Japan, 1989-2003: Explanation of survey data. *Data in Brief*, Vol. 40, 107678. <https://doi.org/10.1016/j.dib.2021.107678>.
- Ogiwara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., and Uchida, Y. (2015). Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, Vol. 6, 1490. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2015.01490>.
- Stojic, I., Wei, Q., and Ren, X. (2020). Historical sustenance style and social orientations in China: Chinese Mongolians are more Independent than Han Chinese. *Frontiers in Psychology*, Vol. 11, 864. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.00864>.
- Twenge, J. M., Abebe, E. M., and Campbell, W. K. (2010). Fitting in or standing out: Trends in American parents' choices for children's names, 1880-2007. *Social Psychological and Personality Science*, Vol. 1, 19-25. <https://doi.org/10.1177/1948550609349515>.
- Twenge, J. M., Dawson, L., and Campbell, W. K. (2016). Still standing out: Children's names in the United States during the Great Recession and correlations with economic indicators. *Journal of Applied Social Psychology*, Vol. 46, 663-670. <https://doi.org/10.1111/jasp.12409>.

(受稿 : 2021年12月31日 受理 : 2022年1月17日)